HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	元・明代の史料にみえるアイヌとアイヌ文化
Author(s)	中村, 和之
Citation	138-145 新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56288
Type	report
File Information	pt3ch1.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第１章　元・明代の史料にみえるアイヌとアイヌ文化

中村　和之

はじめに

今回のシンポジウムでは、アイヌ文化、アイヌのエスニシティーの成立について議論したいという課題をいただきました。しかし今日、私は一つの結論を皆様にお示しできるような準備はできておりません。まずその点を、先におわびしたいと思います。

モンゴル帝国・元朝はアムール河の河口から100㎞以上もさかのぼった、現在のティル村に東征元帥府という役所を置きまして、ここをこの地域の支配の中心にいたしました。続く明朝は、ヌルガン（奴児干）都司という役所をここに置いております。したがいまして現在のティル村は、一貫してアムール河下流域の支配の中心であったと思われます（図1）。今日ご紹介する史料は、モンゴル帝国・元朝、それに明朝がアムール河下流域からサハリン島に勢力を伸ばしたことに係わって、集められた情報を基に記されたものと考えられます。

図１　元・明代のアムール河下流域とサハリン島

１．元朝のサハリン島（樺太）進出と骨嵬・亦里于

モンゴル帝国・元朝がアムール河下流域に進出したのは、クビライ＝カアンが即位してから4年後のことです。『元史』巻5、世祖本紀2、至元元年11月辛巳（旧暦11月10日；西暦1264年11月30日）の条には、

> 骨嵬を征した。是より先、吉里迷が内附し、其の国の東に骨嵬・亦里于の両の部が有って、歳　来て　疆を侵すと言った。故で往して之を征した。

と書いてあります。これはモンゴル帝国・元朝の側が正しいという立場で書いてあります。骨嵬とはアイヌ民族の祖先のことですが、その骨嵬が、お上に盾を突く賊だという立場で書かれているわけです。吉烈迷は、現在のニヴフ民族の祖先に当たる、かつてはギリヤークといわれていた人たちのことであろうと思われています。なぜ骨嵬がアイヌと言えるのかについては、清代の史料から、明代・元代の史料へとさかのぼって論証した結果です。論証の過程はここでは省略しますが、日本の東洋史の学界ではほぼ通説となっています。

この骨嵬・亦里于という二つの集団が、吉里迷の境界を侵すので、元軍は吉里迷を守るため

に骨嵬を攻めたと書かれています。これが中国史料にアイヌのことが出てくる初出の例になります。これより前には、アイヌ民族の祖先と明確にいえる集団が中国史料に出てくることはありません。

亦里于については、『元史』のここにしか出てきません。私はこの亦里于と呼ばれる人たちも、系譜的には今のアイヌ民族につながる集団だろうと思っています［中村 2006］。ただし、これは少数意見です。和田清を始めとして［和田 1942］、日本の多くの研究者は亦里于をツングース系の集団としています。しかし、骨嵬と亦里于が、同じ方向から吉烈迷の領域に入ってくるという記述に注目すると、骨嵬と亦里于は、宗谷海峡を越えてサハリン島に来たと思われます。もしそうであれば、宗谷海峡より南の地域に、亦里于の遺跡がなければならないことになります。亦里于がツングース系の集団だというのであれば、北海道の北部にツングース系の集団の遺跡がなければなりません。しかしそういう遺跡は見つかっていません。したがって私は、この亦里于と呼ばれる集団もアイヌ民族につながる人たち、つまり擦文文化人の子孫ではないかと考えています。

このようにして 1264 年に初めて、モンゴル帝国・元朝とアイヌとの間の戦いが史料に登場しました。つぎには、『国朝文類（元文類）』にアイヌの記述が現れます。『国朝文類』巻 41、経世大典序録、招捕に、『経世大典』という当時の政治制度のことについて書かれた本の要約があります。残念ながら、『経世大典』は散逸してしまって読むことができません。

(A) 至元十年、征東招討使・塔匣剌の呈に「前に海が風と浪で勢た以に渡り難く、觧因・吉烈迷・骨嵬等の地を征伐するには到ら不かった。去年征行め、弩児哥の地に至り、問べた得、兀的哥人の厭薛が『骨嵬を征しようと欲るなら、必ず兵を聚め、冬月に賽哥小海の渡口が結凍するのを候つべきである。氷上であれば方て前去むことが可きる。先に觧因・吉烈迷を征ち、方て骨嵬の界に到る』と称った」とある。云云。

(B) 元貞二年正月、招討司の上言に「吉烈迷人の百戸の蓋分と不忽里等は先に逃げて内豁曈に往き、叛人と結連し、骨嵬に投順して耗を作したが、旨を奉じて之を招させようとした。千戸の皮牙思が『蓋分等は已に反いたのだから、招させることは可き不い』と以為ので、遂に止にした」とある。

(C) 大徳元年五月、骨嵬の賊の瓦英は、吉烈迷の造った所の黄窩児船に乗って海を過り、只里馬觜子に至って乱を作した。八月、吉里迷人の奴馬失吉は海を過り、為子砦に至り、内豁曈の人に遇って、「吉烈迷人の牙乞木が『骨嵬の賊と不忽思等が、今年の海が凍る比に以ら、果夥を過ぎ、打鷹人を虜掠に欲うとしている』と称っているので、乞うぞ之を討してください」と言った。既而に遼陽省よりの咨には「三月五日、吉烈迷の百戸の兀勧吉等が来帰たので、魚・糧・網・扇を給え、存恤って（決められた）坐に位せ、管兀者吉烈迷万戸府に移文して収管した。六月五日、官軍が賊を吸剌豁曈に於て敗った。七月八日、骨嵬の賊の玉不廉古は果夥より海を過り、拂里河に入ったが、官軍は之を敗った」とある。

(D) 九年六月、吉烈迷人の甲古の報には「骨嵬の賊が南木合等を劫った」とあり、官軍は之を追したが及ば不かった。（骨嵬は）拙墨河を過ぎ劫掠した。

(E) 至大元年、吉烈迷の百戸の乞失乞乃が「骨嵬の玉善奴が降を欲んでおり、大河沙という者を遣し訥里干に至らせた」と言った。又、吉烈迷人の多伸奴・亦吉奴が来て「玉善

奴・瓦英等が降を乞うている。刀と甲を持ってきて、頭目の皮先吉に与し、且に毎年異い皮を貢すると言った。夏の間に荅剌不魚が出る時に以ら（彼らを一緒に）回還す」と言った。云云。

上の文章はすべて、元代の公文書をダイジェストしたものです。元代の公文書には大きな特徴があります。それは、下級官庁から報告が上がってきて、中央で部局ごとに文書をやりとりして審議し、最終的に皇帝の決裁を得て決定されるという一連の行政処理の文書の形を、直接話法でそのまま残してあることです。ただし『国朝文類』は、その行政処理の結論に至る部分を引用しておりません。せめて『経世大典』が残っていれば、どういう結論だったかは分かったはずです。ただこのように、骨嵬に関する公文書が一つにまとまっているのは貴重です。なおこの招捕という項には、お上に楯を突く者たちをどうやって討ち平らげたかという史料が集められています。実は、この招捕の項の前に征伐という項があります。征伐には、元朝が敵対国として征伐の対象とした国との戦いの史料が集められています。日本については、元寇関係の史料がここにとまとまっています。ですから、招捕の対象である骨嵬と、征伐の対象である日本とは明確に区別されているのです。

さて、この史料に登場する人名の多くは、どの集団に属するのかが記されています。下に、集団ごとに分けてみました。なお（ ）のなかは、どの段落に登場するのかを示しています。音の比定は、藤堂明保編『学研大漢和辞典』によりましたが、この本は元代の音については、周徳清が著わした韻書『中原音韻』に基づいています。

兀的哥人	厭薛 iem-sie(A)
吉烈迷人	蓋分 kai-fən(B)、不忽里 pu-hu-li(B)、皮牙思 p‘i-ia-sï(B)、 奴馬失吉 nu-ma-ʃɪəi-kiəi(C)、牙乞木 ia-kiəi-mu(C)、 兀勧吉 u-k‘iuen-kiəi(C)、甲古 kia-ku(D)、 乞失乞乃 k‘iəi-ʃɪəi-k‘iəi-nai(E)、多伸奴 tuo-ʃɪən-nu(E)、 亦吉奴 iəi-kiəi-nu(E)、皮先吉 p‘i-sien-kiəi(E)、
骨嵬	瓦英 ua-iəŋ(C、E)、玉不廉古 iu-pu-liem-ku(C)、玉善奴 iu-ʃɪen-nu(E)
不明	不忽思 pu-hu-sï(C)、大河沙 ta-ho-ṣa(E)、荅剌不魚 ta-la-pu-iu(E)

兀的哥人とは、ツングース系のウデヘ民族につながる人たちなのだろうと思われます。つぎに吉烈迷人とは、吉里迷と同じことです。骨嵬には、瓦英、玉不廉古、玉善奴の 3 人があります。それから、どの集団に属するか分からないものが、不忽思、大河沙、荅剌不魚 3 人です。私は不忽思とは、吉烈迷人として出てくる不忽里と同一人物であろうと思っています。ではどちらが書き間違いかといいますと、不忽里が間違いであろうと思います。その理由は、吉烈迷人には皮牙思のように、語尾が「～思 sï」となっている人名があるからです。不忽思（ないし不忽里）が吉烈迷で間違いがなければ、どの集団に属するか不明なのは大河沙と荅剌不魚の 2 人ということになります。また吉烈迷の名前には、「～吉 kiəi」や「～乃 nai」という語尾が見受けられます。このような特徴は骨嵬には見られず、吉烈迷と骨嵬の名前には、はっきりした違いがあるといえます。

さて骨嵬の 3 人のうち、瓦英と玉善奴の名前からは、アイヌ民族の男性の名前の特徴を読み取ることができます。シャクシャインやコシャマインのように、アイヌの成人男性には「～

ain」という語尾の名前があります。瓦英と玉善奴は、その例だということができます。ここで注目されるのは、(E) の段落に見える多伸奴と亦吉奴の 2 人です。この吉烈迷人の多伸奴と亦吉奴は、骨嵬と元朝との間を取り持とうとしています。そんな人たちが、吉烈迷のなかで彼らだけ、アイヌ風の名前を持っているということになります。これから先は、想像の域を出ないのですが、彼ら 2 人が吉烈迷のことばに堪能な骨嵬であるとか、あるいは吉烈迷と骨嵬の混血であるとか、そういう可能性が考えられます。いずれにせよ、骨嵬と吉烈迷の間には、密接な関係があったことは間違いがありません。

つぎに (C) の段落に出てくる黄窩児船という船ですが、『遼東志』巻 9 にみえる、アムール河下流域で用いられている「広窟魯」という船が、黄窩児船と同じものとされています［和田 1942］。『遼東志』によれば、この船は、「五板船」であり、「頭に枒杈になった木の根を置くが、これは鹿の角の状の如であり、両の舷で槳を盪ぎ、江の中を疾行む」と記されています。この記述によって、黄窩児船も五板船、つまり 5 枚の板からなる板船であったと推定されます。この五板船は、清代の楊賓『柳辺紀略』にも記述があります。この船は、10 人余りが乗ることができ、木の釘を用い、板の間に青苔を詰めていたことが記されています。同じような記述は、間宮林蔵『北夷分界余話』巻 9 にも「舟は……五葉松を以て是を作り、其釘は悉く木を用ゆ」とあります。

アムール河流域やサハリン島の板船といえば、ニヴフの板船が知られています。この船はアムールの船 амурская лодка とも呼ばれますが、これと同じ船を作る技術は、ナーナイやサハリンアイヌ（カラフトアイヌ）にもあり、サハリンアイヌの板船は以前、金谷栄二郎氏と宇田川洋氏によって復元がなされています［金谷・宇田川 1989］。しかし、アイヌ語やナーナイ語などの船に関する語彙には、黄窩児 huaŋ-uo-rɪ あるいは広窟魯 kuaŋ-k'u-lu に類する語を見いだすことはきません。ニヴフ語で船は mu といいますが、板船のことは kalmr mu といいます［加藤 1986］。kalmr とは、板という意味ですが、広窟魯が板船であったことから考えて、黄窩児・広窟魯は kalmr を漢字音で表したものではないかと思われます。このように考えると、黄窩児船はニヴフの板船で良いことになります（図 2）。黄窩児船がニヴフ板船で間違いがないとすれば、骨嵬は吉烈迷の海上移動の技術に依存する形で、北海道からサハリン島へさらに大陸へと移動していたことがわかります。

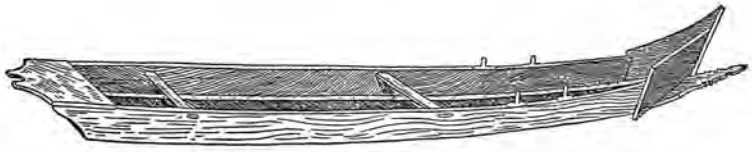

図 2　ニヴフの板船

一方、元朝がなぜこの事実を記録したかといえば、船という海上移動の重要な手段を、本来は自分たちに従っているはずの吉烈迷が骨嵬に渡していたからです。これは元朝にとっては、許し難いことだったのだろうと思います。こういうところからも、骨嵬と吉烈迷の間の密接な関係を読み取ることができます。

ではここで、この吉烈迷・吉里迷という人たちについて検討してみましょう。まず彼らは、船を作るなど海上移動に優れた人たちであったと思われます。それから、(C) の段落の中ほどに「三月五日、吉烈迷の百戸の兀勧吉等が来帰たので、魚・糧・網・扇を給え、存恤って（決められた）坐に位せ…」とあります。これはただやって来たのではなく、骨嵬に追われて逃げてきたのだと思います。その際元朝は、吉烈迷に魚と糧、それに網と扇を与えています。これ

はどういう意味でしょうか。糧とは穀物を意味することが多いので、魚と糧は当座の食糧であったと思われます。それから網を与えています。つまり彼らは網で何かを捕って食べる、そういう人たちなのではないかと思います。最後に扇ですが、この兀勧吉は百戸という位をもらっていますから、一種の身分の証しとして扇を与えたのではないかと思います。このように、吉烈迷と呼ばれる人たちは、非常に海との関係が強いということを見て取ることができます。

以上のことから私は、この吉烈迷と呼ばれる人たちをオホーツク文化人およびその子孫とする、菊池俊彦氏の説を再確認することができると考えています［菊池 1995］。骨嵬とは宗谷海峡を北上してくる擦文文化人の子孫たちです。先に私は、骨嵬も亦里于もアイヌであろうとの考えをのべました。では亦里于の実像を、もう少し明らかにすることはできないのでしょうか。瀬川拓郎氏がすでに紹介されているように［瀬川 2005］、サハリン島の東海岸のオホーツコエ 3 遺跡が、ユジノサハリンスク市のサハリン州立郷土誌博物館の O.A. シュービナさんによって発掘されています。この遺跡の特徴は、オホーツク文化の最終末期の南貝塚期の竪穴に、擦文文化に特有のかまどが付いていることです。つまり、オホーツク文化と擦文文化の融合が起きているのです。私は、こういう人たちが亦里于と呼ばれる人たちなのではないのだろうかと考えています。つまり日本海交易の延長上に、日本海側をどんどん上ってきて、元と紛争を起こす、サハリン島の西海岸で活動した人たちが骨嵬と呼ばれ、東海岸にかまどを残しながらオホーツク文化人と融合を起こした人たち、こういう人たちが亦里于と呼ばれたのではないかと、今のところは考えています。

２．明朝のヌルガン都司経営と苦兀・苦夷

つぎに、明代になりますと第 3 代の永楽帝のときに、アムール河下流域に進出してきます。そこで、1413 年の『勅修奴児干永寧寺記』と 1433 年の『重建永寧寺記』という二つの石碑がティル村に立てられました。間宮林蔵は、1809 年にティル村にさしかかった際、二つの石碑が立っているのを見て、『東韃地方紀行』に絵を残しています。現在はこれらの石碑は、ウラジオストーク市の沿海地方国立アルセニエフ総合博物館に移されています。これらの石碑では、アイヌが苦夷と表記されています。『勅修奴児干永寧寺記』には、

> 海西自り奴児干に抵り、海の外の苦夷の諸民に及ぶまで、男婦に賜うに衣服･器用を以てし、給えるに穀米を以てし、宴すに酒饌を以てしたところ、皆踊躍て懽忻び、一人も梗化って率わない者は無かった。

とあり、『重建永寧寺記』には、

> 道は万余里、人には女直、或いは野人・吉列迷・苦夷が有る。重訳によら非れば、其の言を暁かに莫い。武で威するので非れば、其の心を服させ莫い。舟に乗ら非けば其の地に至り難い。

とあります。ただしこれらの史料に、苦夷について何か新しい情報があるかというと、実はそれほどでもありません。明朝と朝貢関係を結んでいたことと、何回か通訳をしなければ、言葉が通じないという程度のことしか分かりません。むしろ『開原新志』と『遼東志』という二つの明初の地方志の方が、多くの貴重な情報を与えてくれます。『開原新志』（『大明一統志』巻 89、外夷、女直）には、

苦兀は奴児干の海の東に在る。人の身は多毛で、熊皮を戴き、花布を衣る。親が死ねば、腸胃を刳り、曝乾して之を負い、飲食のときは必ず祭り、三年の後に之を棄てる。

とあります。『開原新志』は『大明一統志』という本に引用されて残っているだけで、原本はもう散逸してございません。また『遼東志』巻9、外志、建州、には、

苦兀は奴児干の海の東に在る。身は多毛で、頭に熊皮を帯び、身に花布を衣る。木の弓を持ち、矢は尺余、毒を鏃に塗り、中れば必ず死ぬ。器械は堅利である。父母が死ねば、腸胃を刳り去り、屍体は曝乾して、出入に之を負い、飲食のときは必ず祭り、居処には敢て対しない、約三年に至り、然る後之を棄てる。

とあります。苦兀も苦夷と同じく、アイヌのことです。

『遼東志』は1443年に初めての編纂が終わり、1488年に改訂され、1529年にもう1回改訂されました。出版されたのは1529年の重修本です。ただ、中国の地方志を読んでおりますと、多くの場合、古いところは前の本を引用しています。ですから、この1529年重修の『遼東志』も、1443年の初稿本の内容が残っている可能性があります。1413年の『勅修奴児干永寧寺記』と1433年の『重建永寧寺記』が示すように、明の軍隊は15世紀の初めにアムール河下流域に進出しています。1443年の初稿本は、この時期に獲得した知識を基に書かれていると考えられます。なおこの後、1449年の土木の変で、明朝は北の地域の支配権をほとんど放棄することになりますので、それ以降は、新しい知識が得られた可能性は低くなります。ですから『遼東志』は、15世紀前半に得られた知識で書かれていると考えられるわけです。なお『開原新志』については、これを元代のものと考える説［和田1942］と、明代のものとする説［姚1984］があります。私は『開原新志』は、明代のものだと考えています。

また、元代の地方志である戚輔之『遼東志略』（『説郛』62所収）には、

遼東の地は方が数千里で、……又東北は奴児干に至り、海を渉ると吉列迷などの諸の夷の地が有り、咸て統内に属している。

とあります。この史料は、『説郛』という叢書に引用された部分しか残っておりません。『遼東志略』には吉列迷しか現われず、骨嵬については書かれていません。このことを見ますと、元代では地方志に骨嵬のことが書かれるほど情報が得られておらず、明代になって安定した朝貢関係ができてから、記録が残ったのだろうと考えられます。

さて、『開原新志』と『遼東志』をご一読いただけるとお分かりだと思いますが、両者の記述は非常に似ています。ただ『開原新志』に情報を加えて『遼東志』にしたのか、あるいは共通の祖本があって、そこからそれぞれの史料が成立したのかについては不明です。『開原新志』と『遼東志』に共通する内容は、以下の5点です。

1）熊皮を頭に戴くこと
2）花布を着ること
3）父母の死体から内臓を取り除いてミイラを作ること
4）食事の際に、父母のミイラに対して何らかの儀礼をすること
5）弔いが三年間で終わること

また『遼東志』のみにみえる内容は、以下の2点です。

6）木の弓を用い、矢が1尺余りであること

7）鏃に毒を塗ること

これらのうち 6）については、明代の 1 尺は約 32 ㎝です。現存するアイヌ民族の矢は、だいたい 40 ㎝から 50 ㎝くらいです。ですから私は、矢が 1 尺余りという記述に対応すると考えています。それから 7）の毒矢については、よく知られていることです。つぎに 3）については、間宮林蔵『北夷分界余話』巻 6、に関係する記述があります。

> 葬礼は蝦夷島と大に異にして、凡酋長たる者死する時は、先腹をさいて腸を去り、家外に図のごとくなる床を設け、其上にあげ置、日々女夷をして水をそゝぎ是を洗しめ、日に乾して腐敗の事なからしむ。是を名づけてウフイと云。如レ斯する事凡一年許〔一年を経るにあらざれば其棺成就しがたし〕の日月を経て、其四肢身体少しくも臭腐の事なき時は、女夷を賞して衣服・酒・煙草の類を与ふ。若し少しくも腐敗する事有に当ては、忽女夷を殺して先に葬り、其後死人を埋葬すと云〔女夷を殺すの事、近代に至て廃するに似たり〕。

この風習は、サハリンアイヌだけに見られるようですが、ミイラを作ることをウフイというと書かれています。それから、5）については、『蝦夷島記』「蝦夷人葬礼の事」（『続々群書類従』第 9 所収）に、

> 一病死の蝦夷をば巻申候布にてまくのよし。横に長く臥せ櫃に入、三年は家の内に置、三年期過る地中に納、上に塚を築、木を立、死人の所持したる室内を一色二色も塚の上の木にかけ置よし。男女塚築様異なり。但右三年の内妻女喪を勤、子弟は五十日・三十日喪に居て三年を不レ勤、妻女は三年過て夫の近き親類の方へ嫁す。

とあります。『蝦夷島記』は 1681 年に成立した本ですが、弔いが 3 年で終わる、遺体を室内に置くなどの点は、『開原新志』と『遼東志』の記述に対応します。

最後に、私が疑問に思っていますのは、2）の花布ということばです。花布は、『諸橋大漢和』では更紗と出てまいります。元代の随筆である孔齊『至正直記』巻 1、松江花布、には、

> 近時、松江（府）では能く青い花布を染めている。宛も一軸の院畫の如であり、或いは蘆と雁、それに花と草が尤も妙である。此は海外の倭国より出で、而して呉の人が巧に之を效たのであり、木綿の布を染る以に、印を蓋すの也。青は久く浣っても亦く脱することが不い。嘗は靠や裀之類で為った。

とあります。孔齊は、元末に生まれて明初に死んだ人物なので、14 世紀の人です。彼が松江の花布について書いています。松江というのは、江南デルタの松江府のことです。ここに出てくる花布は、木綿を藍で染めたいわゆる印花布のことです。つまり、花布が木綿を示すことについては、元代の用例があることになります。したがって、明初の史料である『開原新志』や『遼東志』の花布が、木綿である可能性はあるわけです。ただし 15 世紀の初頭に、木綿が北海道やサハリン島まで運ばれてきていたのか、これは疑問です。たしかにこの時期、日本の商人が朝鮮半島から木綿を買いつけていることは事実です。中国でも朝鮮半島でも、木綿は防寒衣として使われていますので、寒いところに木綿が運ばれる可能性はあるのではないかとも思いますが、時期的には少し早すぎると思われます。もし花布が木綿でなければ、アットゥシのような樹皮衣や、イラクサの繊維で織ったレタラペなど、アイヌ民族に特徴的な衣服の素材を花布ということばで表したのかもしれません。

なお、『開原新志』と『遼東志』に見えるアムール河下流域の諸集団については、増井寛也氏

の研究があります［増井 1982］。『開原新志』と『遼東志』では、花布を着るという記述は苦兀にしか見えません。ですから、もし花布が木綿だったとしても、中国や朝鮮半島からアムール河・サハリン島を経由して、北回りで苦兀に供給されたという可能性はないといえます。アットゥシやレタラペなどのアイヌ民族に特有な自製品を花布といっているのであれば、花布の記述が苦兀のところにしか出てこないのは当然です。以上のように、花布については、今後の課題せざるを得ないのですが、もし花布が木綿だったとすると、日本列島の北方の交易が、驚くほど急速に北に伸びてサハリン島に及んだことになります。

おわりに

元代、明代の史料に見えるアイヌ民族の祖先の姿を見てきました。今日につながるようなアイヌ文化の形成という点でいえば、15 世紀初頭の明初の史料には、間違いなくアイヌ文化が形成されたと見られる証拠をあげることができます。また元代の史料でも、アイヌとニヴフとの関係があったことを跡づけることができます。ただし、元代の史料の内容からは、アイヌ文化の形成にまで踏みこむことはできません。

単なる事例報告に終わってしまい恐縮ではありますが、以上で私の報告を閉じさせていただきたいと思います。

引用文献

加藤九祚 1986『北東アジア民族学史の研究』恒文社。
菊池俊彦 1995『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会。
瀬川拓郎 2005「同化・変容・残存－住居にみるアイヌ文化の成立過程－」海交史研究会考古学論集刊行会編『海と考古学』六一書房。
金谷栄二郎・宇田川洋 1989『樺太アイヌの板舟』常呂町郷土研究同好会。
中村和之 2006「金・元・明朝の北東アジア政策と日本列島」天野哲也・臼杵勲・菊池俊彦編『北方世界の交流と変容－中世の北東アジアと日本列島』山川出版社。
増井寛也 1982「『乞列迷四種』試論－元明時代のアムールランド」『立命館文学』第 444･445 号。
姚　大力 1984「元遼陽行省各族的分布」『元史及北方民族史研究集刊』第 8 期。
和田　清 1942「支那の記載に現はれたる黒龍江下流域の原住民」『東亜史論藪』生活社。